

講演要旨:「武士道精神とクラーク精神の奇跡の邂逅(かいこう)」

藤田正一(北大名誉教授)

- ★ドイツ留学の途上、立ち寄ったロンドンでオオオニバスの花を目にしなければ、クラーク博士はマサチューセッツ農科大学の学長になることもなく、日本に来ることもなかった。
- ★クラークのドイツ留学がなければ、産業革命の結果としての農村の過疎化、荒廃と、ヨーロッパにおけるその対応策としての農業教育革命を目撃することはなかった。従って、同じことが起こっているニューイングランドの農村改革として、マサチューセッツ農科大学を誘致する運動をすることもなかったかもしれない。
- ★アメリカ南北戦争がなければ、クラーク博士が高揚したアメリカ独立宣言の精神を札幌で、日本の青年たちに伝えることはなかったかもしれない。
- ★教育を北海道開拓の中心に据えた黒田清隆がいなければ、クラーク博士の招聘はなかった。
- ★薩英戦争がなければ、クラーク招聘に関わった吉田清成も森有礼も薩摩藩留学生として密出国することはなく、駐米公使となることもなく、新島襄との出会いもなく、博士の存在を知ることもしなかったかもしれない。

しかしそれら全てが起こった。そしてクラーク博士は彼の50歳の誕生日に、札幌の地に降り立った。クラークと黒田は会見後直ちに打ち解け、相互に敬意をもった。両者の相性は非常に良かった。クラークの直接の上司・調所広文校長も「部下に自由に存分にやらせ、責任は自分が取る」という典型的薩摩人指導者であった。

待っていたのは、学問以外に身を立てる術のない、戊辰戦争で「賊軍」に属した藩の子弟たちであった。優秀な資質と食い入るような意欲があった。

幼い頃から士族の子弟として、あるいは平民出身であっても、当時の日本の伝統的な道徳律、武士道精神を身につけていた初期札幌農学校生徒たちには、入学と同時に新たな精神が紹介された。

自由のうちに自主性、自律性を涵養する教育、自主・独立の精神、弱者の側に立つ視点、利他博愛の精神、規則はなくても「紳士たれ」という内からの自律の精神、確固たる個の確立、個人の尊重、そして、私利私欲の充足ではない「高邁なる大志」の教

え。これらが怒涛のごとく彼らを襲った新たな価値観であった。

それはクラーク博士が携えてきたピューリタン精神を色濃く反映したアメリカ独立宣言の精神と、クラークその人の精神であった。それを受け取る側には武士道と言う伝統精神があった。

異なる思想は際立ち、同じ思想は共鳴を呼ぶ。明治の辺境の地札幌で両者が出会い、白熱を発し合った。それを伝えた側の人間性、受けた側の資質、明治維新と言う国民の目が世界に開かれた時代、それらが札幌農学校と言うルツボの中で溶融し、二つの精神は融合され、錬金術の奇跡のごとく札幌農学校を貫く一本の精神が形成されたのである。

ピューリタン精神の理想主義は伝統的な武士道精神と融和して一つの精神となり、僻遠の地でアウトサイダー的客観が可能であった故であろうか、以降、この札幌農学校精神が近代日本の国のあり方や人の生き方に、常に、もう一つの選択肢を提案し続けた：

当時の、「立身出世による富と地位と名声とを求めぬ生き方」に対しては、「富や私利私欲の充足ではなく、名声でもなく、知識と正義そして人々の向上と、己の人格の完成を大志の目標として励め」とするクラークの「Be Ambitious 大志の教え」。

明治の極端な「欧化主義」に対しては日本至上主義ではない、開かれた国粋主義：「国粋保存主義」（三期生・志賀重昂）と「武士道」の再認識（二期生・新渡戸稲造）。

「富国強兵と戦争政策」に対しては「非戦平和の主張」（二期生・内村鑑三）。

「植民地主義、拡張主義、大国主義」に対しては「反植民地、小国主義」（一期生・大島正健の弟子、石橋湛山）

15年戦争に対しては「ペン」による果敢な抵抗（二期生・新渡戸稲造の弟子、矢内原忠雄、南原繁、森戸辰男ら）。

対米弱腰追従に対しては、GHQに「従順ならざる唯一の日本人」と言われた白洲二郎（二期生・鶴崎久米一の弟子）及び、「日本独自の路線の主張」（一期生・大島正健の弟子、石橋湛山）。

これらはしばしば日本近代史の中で日本と日本人が辿って来た道の対立軸にあり、そうでなくとも、とり得たもう一つの選択肢であった。今日、主流ではないが、利害や保身を判断の基準の外に排し、民と弱者の側に立つ、自主独立、正義、良心の主張の